

AC FA ～女性リンクス
がヤンデレだったら～

トクサン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ラインアークはフィオナによって作られた、アナトリアの傭兵との愛の巣。

コロニーアナトリアの消滅は大体「彼と結婚させてくれないなら、お父様なんて要らない！」と言った彼女の癡癪のせい。

ホワイト・グリントとの死闘の果てに水没した王子はウィンドと絶賛夫婦喧嘩中、『お前と遊覧飛行がしたい、ちよつとクレイドル墜とそう』『早まるな！ ウィンド！』

いつの間にやらカラードランクールの椅子に座った主人公は、メリーゲート、ヴェーロノークと対峙する。

『相性が良いみたいね、私達？（ニッコリ）』

『弾幕、薄く無かったですか？（真顔）』

目次

もう一つの解体戦争	1
共謀	14
後始末	25
メイ・グリーンフィールドの場合	34
リリウム・ウォルコットの場 合 前編	53

もう一つの解体戦争

【ラインアーク】

反企業勢力の集った自由主義者の街、民主主義を掲げた企業支配を肯定しない唯一の勢力、しかし「来る物は拒まず」という姿勢から企業を追放された亡命者やアウトローを大量に抱え込む事となり、結果として政治の腐敗を招いている。

そんな勢力が何故未だ存続しているのか、それは主にカラードランク9位、ネクスト【ホワイト・グリント】によるものである。

カラードランクこそ第9位ではあるが、それが政治的序列である事を皆が知っている、それこそ彼のホワイト・グリントが所属する非企業勢力であるラインアークが未だ存在する事自体が、彼の實力を物語っていた。これが単なる一ネクストであるのならば、企業連は構わず戦争を仕掛けるであろう。それだけの資源と資金が企業には存在している、戦場の尖兵となり下がったネクストに対しA^{チームスラット}Fは正に天敵、百凡のネクストであるならば蹂躪されて終わる。しかし、そのAFさえも磨り潰す個、ネクストの中でも精鋭と呼ばれる怪物達、その中にホワイト・グリントは入っていた。

搭乗リンクスは不明、しかし国家解体戦争後の機体に同一の名前の機体が存在し、当

時の搭乗者ジョシユア・オブライエンの縁者である事が疑われている。アクアビット社を単機で壊滅させた彼の英雄の戦闘能力は凄まじく、コロニーアナトリアにて「アナトリアの傭兵」に撃墜されるまで最強の一角を担っていた。

そのアナトリアの傭兵であるが、ジョシユア・オブライエンによるコロニー襲撃後に行方不明となっており、一説では彼の英雄と共倒れになったと言われている。しかしコロニーアナトリアが存在しない今、真相は闇の中である。また、当時アナトリアの傭兵専属オペレーターであったフィオナ・イエルネフェルトが現ホワイト・グリントのオペレーターを担っている事から、搭乗リンクスは「アナトリアの傭兵」ではないかと疑う者も居る、全ては憶測の域を出ないが……。

なんて色々面倒な話ではあるが、真実は存外俗物的である。

コロニーアナトリアが現在存在しないのは、結婚を反対されたフィオナが「彼との婚約を求めないならお父様なんて要らないッ！」と癩癩を起し、アナトリアの英雄こと彼に要請しワザとオーメルサイエンスの切り札「ゼロ」との戦闘時、大立ち回りをして復旧不可能な程の損傷を負わせたとか。

現在のラインアークは「私達二人だけの世界を作りましょう……？」というフィオナの要望により作られ、現在は二人の愛の巢になっているとか。

真実はいつも企業連の予想を超える。

今回の例もそうだ、彼から「……最近、フィオナが一日三回はしないと拗ねるんだ」とか惚気を聞かされた時、もっと真面目に耳を傾けておけば良かったと後悔する。いや、別に惚気を真面目に聞けばよかったとかそういう話ではない。ミツシヨン中だと言うのに公開通信でふざけんなこの絶倫野郎と罵倒したくなかった、良く耐えた俺、しなかったのは鋼の理性故である、これでも俺は仲間内でクールキャラで通っているんだ、それを今更崩したくない。

兎に角彼は今回の事を、非常に悔しくはあるが彼は半ば予想していた。

「お前の僚機……ヴェーロノーク、メリーゲート、あの二機についてなんだが」
「フィオナと同じ匂いがする」

そんな事をホワイト・グリントの搭乗者、「アナトリアの傭兵」こと彼は口にした。何言つてやがるんだこの人外は、そう思った当時の俺をぶん殴つてやりたい。

メイ・グリンフィールドは俺の嫁とか、エイルプールたんハアハアとか俺マジふざければこんな事態にはならなかった。

考えてみれば今回の件は最初から怪しかったのだ。

『……ミツシヨンを説明しよう、雇い主はいつものGA……いや、今回はインテリオルと

の合同ミツシヨン……という事になっている、多分』

あの自信満々に、男気溢れるG Aミツシヨン仲介人が珍しく、そう、珍しく意気消沈した声でミツシヨンを説明して来たのだ。これだけで俺の危機管理ポルテージは一気に上昇した、ネクスト乗りは傭兵だが自分の身の丈に合わないミツシヨンは基本受けない、金も確かに大事だが死んでは元も子もない。

だからミツシヨン説明は一言も聞き逃さない気で聞くし、状況に合わせた機体構成も真剣に行く、だから今回の様な妙に歯切れの悪いミツシヨン説明は危険を感知するには十二分だった。

『目標は……あー……ネクスト【サベージビースト】の撃破だ、お前ならば容易な仕事だろう？ 場所は旧チャイニーズ海域……それと、今回は僚機として【メリーゲート】、【ヴェーロノーク】の二機を付ける』

これも明らかにおかしかった、サベージビーストと言えばカラードランク22の弱小ネクストだ、言つては何だが俺の相手では無い。彼の水没王子と共闘してホワイト・グリントを撃破した俺は現在名実ともにカラードランク1の称号を受け取っている。

死んだふりをして今現在フィオナと束の間の休暇をエンジョイしている英雄野郎と、水没したフリをしてウイン・D・ファンシヨンと夫婦喧嘩している黒幕野郎はさておき、明らかにバランスの取れない戦力だ。

俺単機ならまだしも、それに僚機二機を付ける……安くは無い出費だ、インテリオルとの合同ミッションともなればその背後で動く金銭は莫大な量となるだろう。それほど価値がサベージビースト撃破にあるとは思えない、彼は独立傭兵であるし企業抱えのネクスト撃破による戦力減退も狙えない、企業同士が手を組んでフリーランスの傭兵を狙うなど稀だ。ホワイト・グリントやステイシスの様な単機でパワーバランスを崩すネクストならまだしも、相手はランク相応の実力しか持たない、言つては何だが百凡のネクストでしかなかった、企業側は明らかに何かを隠している。

しかし報酬は破格、少なくとも通常ミッションの三倍近い金額が支払われる。更に難易度はお察し、本当にサベージビースト単機の撃破だけならばこれ程楽な仕事も無かった。

それに当時の俺は、やつほいメリーちゃんとヴェーロちゃん二人のハーレムだぺろぺろとか考えていたから結局ホイホイミッションを受けて、今に至る。

『……作戦エリアに侵入、妙だな、ネクストの反応が無い』

念には念を入れて一応対ネクスト戦用の装備で固めて来た俺を待っていたのは、空っぽの作戦エリアだった。旧チャイニーズ海域は嘗て繁栄を誇った中国のビル街が海面上昇によつて放棄され出来上がったエリア、その中央に侵入した俺はネクストの索敵機能を最大にして上空待機するが、無情にもMAPに表示される敵性勢力は無し。

『GAからの情報では現時刻に目標ネクストを当エリアまで誘導するとの事だったが……何をやっているんだ』

愛しのお姉さまであるオペレーター「セレン・ヘイズ」が苛立った声を上げる。元々このミッションには乗り気ではなかった彼女だ、そこに企業側の不手際が重なって更に機嫌を悪くしていた。基本的に依頼を持つてくるのは彼女の仕事だが、そこから何を受けるかと言う話は俺が決める。しかし今回の依頼は珍しくセレンが口を出し、「余り気乗りしない」と言う言葉を頂いていた。

まあ、確かに見るからに怪しい依頼だ、もし俺単機のみであつたら断っていた事だろう。

『こちらメリーゲートよ、作戦エリアに侵入したわ……敵ネクスト反応が無いけれど、もしかしてもう撃墜したのかしら？』

嫁キター！ とはしやぎはしない、内面で喜び表情筋は微塵も動かさない。その緑色の機体色とニツコリマークは俺の心のオアシス、重量機だから上手く盾にしろつて？ ふざけんな嫁に攻撃当てさせるわけねえだろ敵は残らずぬところす。

メリーゲートはそのまま俺の着地したビルに降り立ち、俺は平静を装い直接通信で状況を伝えた。作戦エリアに最初から反応が無かつた事、GAからも未だ何の報告が無い事、それらを告げるとメリーゲートも困惑の声を返して来た。困惑する嫁かわいい。

『……依頼の伝達ミス、もしくは別動隊の不手際かしら？ どちらにせよ、良い状況では無いわね、作戦開始時刻は既に経過しているわ』

『GAにコンタクトを送っているが、一向に通信が繋がらない、コジマ粒子の濃度、通信障害共に問題は無い筈だが……むっ、作戦エリアに接近する機影アリ！』

セレンの言葉に俺は素早く反応する、AMSによって神経接続された俺の意思を機体が素早く読み取り一瞬のラグも無く機体を上昇させブレードを形成する。続く様にし
てメリーゲートが肩部ミサイルのハッチを解放するが、FCSがロックオンを行う前に
通信が飛んできた。

『こちらヴェーロノーク、ごめんなさい、遅れてしまいました、目標が確認できないのですが……もしかして、既に撃破されてしまいましたか？』

申し訳無さそうな声と共に接近する機影、その特徴的な形は間違いない、ヴェーロノークのモノ。一拍遅れて届く味方の識別信号にFCSが自動でロックを外した、背後でメリーゲートの銃口が下がるのが分かった。

『作戦開始時刻に遅れるなんて、良いご身分ね……と言いたいけれど、まだ作戦は始まっていないわ』

少し棘のある言葉を吐く嫁、じゃない、メリーゲート。やつほいヴェロたんだ今日も可愛いよハアハア、じゃない、ヴェロたんをいじめないで！ という意味も含めて、ま

だ敵ネクストが姿を見せていないことを伝える。すると安心したのか、息を吐き出す音が通信越しに聞こえた、何かエロい、ヴェロたんエロい。

『良かった……敵ネクストの姿が確認出来ないのですが、まだ作戦エリアへの誘導が完了されていないのでしょうか』

『そのようだ、GAからの連絡も無い、最悪、サベージビーストの誘導に失敗したという事態も有り得る』

マジで？ マツハでハチの巢にされちゃったの？ GA弱い、凄く弱い。

なんて事は流石に無いと思う、ミツシヨン詳細で聞かされていたがGAの別動隊は作戦エリア近隣に展開した実弾防御に優れたハイエンド水上機動部隊だ、ネクストを撃破する事は難しいだろうが誘導程度ならば容易だろう。サベージビーストには偽りの依頼としてGA水上機動部隊の撃破、及び近隣に展開する本隊の襲撃という依頼が飛ばされている。

言わずもがな、この本隊の襲撃というのが俺達の事だ。故に最悪、水上機動部隊を壊滅させたとしても、そのままUターンして帰還するなどと言う事は無い筈だ。

誘導経路は作戦エリアから然程離れていない、更に加えて言えば敵ネクストも火力は貧弱、それこそ有澤重工の有澤隆文、【雷電】の様な機体と比べれば数発、数十発の被弾など有って無い様なモノだろう、彼の機体は実弾武装で固められている。GAは元々実

弾防御に優れたパーツを開発する企業だ、それはハイエンドノーマルだとしても同じことが言える。

総評として、誘導失敗となる事はまずありえない、余程のヘマをしない限りは。

問題は、G Aがその余程のヘマをしたという可能性が出て来た訳で……。

『……仕方ない、兎に角G Aとの通信が回復するまで作戦エリア内に留ま……』

『こちらG A所属、ハイエンド水上機動部隊』

セレンが作戦エリア内残留の指示を出そうとした瞬間、横合いから通信が入った。発信源は付近の海上、主は渦中の水上機動部隊。

『……作戦開始時刻は既に回っている、どうなっているんだ？』

指示を遮られた上、G Aの不手際で不機嫌だったセレンの不満は爆発寸前だった。結果、一段と低い声で水上機動部隊の通信者を問い詰める。だが、彼の通信者は「すまない」とだけ謝罪し、それから俺には理解出来ない言葉を吐いた。

『目標ネクストの誘導完了だ、メリーゲート、ヴェーロノーク……周囲の封鎖も完了した』

『遅かったじゃない』

『了解、ヴェーロノーク、目標を確認』

瞬間、鳴り響くアラート。それは自機がロックオンされていると言う警告、思わず呆

然とする俺の代わりにセレンが『何のつもりだ!』と叫んだ。敵の接近を許した覚えはない、少なくとも周囲に俺をロックオンする様な敵性勢力は居ない筈だった。

警告音は味方からー

目の前では未だ識別信号『僚機』である筈の二機から、メリーゲートからは銃口を、ヴェーロノークからはミサイル発射管を向けられている。おかしい、二機は今回味方の筈だろう、識別信号だつてグリーンマークじゃないか。

『私達、相性が良すぎたのよ……怖いくらいに』

『最近弾幕が薄く感じてしまつて……貴方が居ないと、満足出来ないんです』

あれ、何かヤバイ？

そう感じた瞬間に俺は右方向へと燃費を考えない全力QBを敢行。その一拍後にメリーゲートの放つた大口径の弾丸が遥か遠くのビルに着弾、倒壊させた。

『ッ、血迷つたか!』

味方である筈の二機から放たれる弾頭、弾丸、その二機の猛攻から逃れるべくQBを繰り返し離脱を図る。しかし逃がさないとばかりにメリーゲートが距離を詰め、後方からヴェーロノークのミサイルシャワーが迫つた。単機ならばやりようがあつただろう、だが火力重視である機体が二機、高速で迫り来る弾丸と追尾性を持つ弾頭を回避し続けるのは神経をすり減らす作業だった。一発でも被弾を許せば機体が硬直し、続けて弾丸

と弾頭の雨に晒されるだろう、そうなれば如何に重量機と言えど装甲が破られる。

加えて、未だ識別信号が僚機である二機をロックオン出来ず、碌な反撃すらままならない状況だった。

『識別信号を切り替える！ 応戦しろっ、先程の言葉が本当ならば作戦エリアは包囲されている、離脱は困難だ！』

機体の視界から緑アイコンが消え去り、代わりにレッドマークが表示される。ロック制限が解除され、自動的に武装が照準を定めた。やった！これでせめてミサイルの迎撃が出来るぞやっほい！と喜ぶ俺。しかし、それも一瞬の事で再び表示はグリーンマークへと変わってしまう。肩部で展開された速射砲の狙いが逸れ、ロックオンが解除される。

『何だこれは……何をした!?』

セレンが切羽詰まった様に叫ぶ、実際俺自身もナニコレ状態だった。いや、別に嫁とヴェロたんを攻撃するつもりは無いけど、せめてミサイル迎撃位はさせて下さい死んでしまいます。

ロックオンが出来ない為発砲しようにも弾丸が明後日の方向に飛ぶのは分かり切っている、辛うじてブレードを使い牽制代わりの斬り込みは可能だが、飛び道具が封じされたのは致命的であった。

みるみると削られていくP A、被弾はせずとも展開したコジマ粒子の減衰が凄まじい。機体面積よりも広く展開しているP Aに弾丸が撃ち込まれ、徐々にその量を減らしているのだ。まさにジリ貧、武装火薬庫の様な重火器満載の両機体からの猛攻は止まらない。

ちよ、えつ、何、何が起こっているんです？

俺の内面は混乱の極みにあつた。

そんな中、網膜投影された視界の端に文字が走る。

それはG Aと結んだ契約、依頼の目標変更について。小さなウィンドに綴られたそれは、実に空気を読まない変更だった。

こんなクソ忙しい時に何なんだよと思いつながら目を走らせれば、しかし、その内容に思わず機体が傾く。

— ミッション内容の変更を確認

ミッション目標 【ネクスト サベージビーストの撃破】

目標変更— 【メイ・グリーンフィールド エイIIプール 両名との永久婚姻契約】

— 永久婚姻契約

えつ、俺結婚するの？

硬直した機体に、ヴェーロノークの誘導弾頭が突き刺さった。

共謀

喉から悲鳴が出かかる、視界一杯に広がる誘導弾頭と弾丸が次々とP A、ひいては装甲板を強かに叩く。右に左に機体が揺れて爆炎が周囲を包み込んだ。

『A P 六十%減少!』

耳に届くセレンの声、いつも通り冷静かと思いきやその声色は若干焦りを含んでいる、どうにか集中砲火の中を抜け出せば、機体は酷いモノだ。何とか無事ではあるものの、攻撃は全て脚部や腕部、頭部に集中している。どうやら意地でもコックピット周りは狙わないらしい、次々と現れる被害報告を素早く確認する。

— 機体中破 破損部位確認……

表面装甲板融解 右脚部内部機構破損 — 回路切替 完了

機動力低下 K P 減少 再展開迄^{まで}30秒

戦闘継続可能

『動かないで、そうすればすぐ終わるわ』

メリーゲートからの公開通信、その声が届くと同時に視界一杯に弾丸が広がった。それをQ Bで躲しつつ俺は思考を加速させる。

— 永久婚姻契約

それはとどのつまり、結婚という奴だ。

あの二人と結婚、結婚、結婚……

うん、悪くない、いや悪くないどころかそれはつまり合法的に p r p r 出来ると言う事なのだろう？ 悪いどころか良いじゃないか。

あれ、何で俺戦ってるんだっけ？

『どうせ放つておいても誰かに盗られてしまうんです、なら、力で奪い取るしかありません、それがこの世界の常なのですから』

ヴェーロノークから放たれる第三波、ミサイル発射管が火を噴き無数の煙を上げて弾頭が迫り来る。それらを見た瞬間、条件反射で Q B を繰り出す。断続的に続く噴出音は俺の思考に反して刃の様に鋭くミサイルの間を縫った。背後で爆音が鳴り響き、神経接続している俺の背に疑似的な熱を感じた。

あつ、ちよ、何で避けたし俺！ そのまま食らって撃墜されれば甘いハーレム生活ががが。

『……やはり、ランクーは伊達ではありませんか』

再度弾薬を装填しながら言葉を吐くヴェーロノーク、そこに重火器を乱射しながらメリーゲートが答えた。

『分かっていた事でしょう、ヴェーロノーク、FCSが機能しない状態で此処まで戦えるのが彼なのよ』

ロツクオン出来ない状態で飛び回る俺はその会話を聞きながら、いや俺はさっさと墜落されて甘いハーレム生活を送りたいんですけどか思っていた。しかし長年培ってきたネクスト乗りとしての性さがか、迫り来る攻撃を見ると勝手に機体が回避してしまう。神経接続とはつまり、考えて動かすというより自分の体を動かしているに近い。熱いモノに触れたら思わず手を引っ込めてしまう様に、弾丸が迫ってきたら避ける、と言う行為が当たり前になっていた。

まさかこんな所で神経接続が仇になろうとは。

『つ……やはり識別信号が回復しなければ戦えんか……仕方ない、撤退しろ！ イチカバチかだ、包囲網を一点突破する！』

えっ、マジっすか姉さん、や、あの、俺此処で撃墜されて甘いハーレム生活をオーバーブリストなんて事を口にしそうになるが、待つていましたとばかりに機体が急反転、OBがが起動し大量の空気を取り込みながら機体が急加速した。アカン、思考と行動が全く一致してない。

OBは時速凡そ3800 kmを叩き出しメリーゲート、ヴェーロノークの機体が後方に流れる。そして遅れて射出された誘導弾頭が俺を追尾するが速度で言えば若干こちら

の方が早い。

『っ、逃げるつもり!?』

『逃がしません、防衛部隊、お願いします』

そのまま作戦エリア限界までOBを吹かし、離脱寸前、ああハーレムが遠ざかっていく、とか考えている所に。

『高熱源反応、これは……避けろッ』

声に従ってOBを緊急停止、QBでその場から退避した瞬間水色のプラズマ球体が鮮やかに咲いた。空の一角を占める光、この色は見た事がある、いつかのミッションで見た砲台の攻撃、確か……。

『メガリスの高射砲だ?! ラインアークの防衛砲台が何故こんなところに!』

そうだ、確かラインアーク襲撃依頼を受けた時に設置されていた砲台群、VOBを木っ端微塵にしかけた鬼畜プラズマ砲。見れば海上に幾つもの軍艦が浮かび、その背には高射砲を載せていた。

『GAにインテリオル、それにラインアークまで噛んでるのか、この件はッ?!』

しかし、連中の用意はそれだけでは無かったらしい。何か背に氷柱を突っ込まれた様な感覚に陥り、慌てて高度を下げた瞬間、頭上を緑色の光が過ぎ去った。同時に展開中だったPAが消滅しKP値が急激に下がっていく、この現象は今まで飽きるほど見て来

た。

ゆっくり振り向けば、其処には黒い球体が宙に浮かんでいた。

中央にくりぬかれた円型の窪、緑に光る一つ目。

『ソルディオス・オービット……』

最早言葉は無い、アームズフォート A F ランドクラブに搭載されている自律飛行型砲台は、その搭載 A F 無しで稼働していた。それが六基、俺を囲う様に廃墟ビルの中から姿を現す。

『トールラスの変態共まで……』

流石にこの戦力には俺も驚きを隠せない。ネクスト一機に用意する戦力じゃないだろう、それも企業間兵器のオンパレードだ。これは何か、俺はあの英雄野郎に売られたのだろうか？ ふざけんなお前のバカンスの為にホワイト・グリントと死闘を演じるなんてミッション受けてやったのに恩を仇で返しやがって！

『ソルディオス、メガリス高射砲、おまけにネクスト二機とは、G A、インテリオル、ラインアーク……一体何を考えているっ！』

それは俺にもわかりません。

前後左右から眩い光、それはコジマ砲を放つ前兆。ソルディオス・オービットから放たれるコジマ砲をギリギリで避け、上下左右から迫る高射砲の連射も続けて逃れる。殆ど空間制圧攻撃となっているそれらは、例え燃費の良い近接機体と言えど大量の E N 消

費を強いた。

流石に長時間の回避行動は命取り、Q Bを駆使して何とかエリアからの離脱を図ろうとするが、それをプラズマ球体とソルディオス・オービットが阻止する。ソルディオス・オービットは過去のモノから改良を加えられているのか、ネクストのQ Bよりも数段大きい火を噴いてその巨体を瞬間移動の様に掻き消した。

そして次現れるとき、そいつは俺の退路を塞いでいるのだ。

邪魔くせえ、そして死ぬほど硬え

僚機信号は無い為、普通に遠距離での銃火器が使用出来るのだが、連射砲を撃ち込んでも然程効果があるとは言い難かった。銃弾が表面装甲で弾かれているのか火花が散っているのだ、それだけの重装甲で瞬間移動するゴジマ砲台とか頭湧いてるんじゃないの？

おまけに数も揃っている、下からはメガリス高射砲が俺の回避行動を制限し、ソルディオス・オービットが連携してゴジマ砲を放つて来る。何かの拍子に直撃を許せば即撃破、ゴジマ粒子は空間にあるだけでKP減少へと繋がる。六基のソルディオス・オービットは性能向上と引き換えに汚染レベルを引き上げたのか、砲撃を掠めるだけで再展開しかけていたPAが崩壊した。

間隙を縫っては何度かブレードでオービットを斬り付けるも、一撃では墮ちない。高

射砲の被弾覚悟でプラズマ球体に突っ込み、すれ違いざま二度ブレードを突き入れて漸く一基墜ちた、呆れたタフさである、一基落とすのにブレード三振りとか笑えない。

『A P 八十%減少っ！』

いや、これどう考えても詰みですって。

M A P を素早く確認すれば、背後からは僚機信号が二つ迫ってきている。他でも無い、ヴェーロノークとメリーゲートの二機である。この状況で更に二機の増援が現れたら勝利は絶望的である。

もう一基のオービットを何とか撃墜し、流石に機体の危険信号がうるさくなってきた頃、セレンが叫んだ。

『もう良い！ 離脱しろ！ 機体は最悪大破しても構わんツ、作戦エリアからの脱出を最優先するんだ！』

そうは言っても離脱すら難しい。二基減ったとは言えソルディオス・オービットは未だ四基健在、俺がエリアから逃れる素振りを見せれば忽ち退路へと球体を差し込んでくる。

まあ、それにほら、撃墜されたらヴェロたんと嫁のメリーゲートとハアハア出来る訳ですしー

なんて考えるけど動く機体は生存本能に正直。睨いたプラズマの華を上手く躲し、エ

リア外へとQBで逃れようとする。その前方にソルディオス・オービットが体を割り込ませるが、それを少しばかり《勿体ない》方法で退かす。使用できるENは殆ど無い、だからこそENを節約出来て、尚且つ機体を軽量化できる方法だ。

— AMS部分停止、EN供給回路切断、右脚部緊急分離

俺のネクストの右足、それを振り抜く勢いで蹴り上げる。虚空でハイキックする様なモノだ、ネクストに四肢を使った格闘戦など想定されていない。

だから砲弾の代わりとする。

機体補修代金、機体バランスの再調整、使用後のミッションへの弊害、全部度外視した荒業。

蹴りを放った瞬間に右足が分離され、そのまま残留したENがブースターを吹かせたまま高速でソルディオス・オービットに激突した。膝部が装甲に食い込み派手な火花を散らしている、有澤隆文の雷電搭載、老神なんて目じゃない、からこそ超大口径の特大型砲弾だ。QBの勢いも加わってソルディオス・オービットごと脚部は海へと落ちていく。

そして俺はそのまま最高速度を保ってエリアを飛び抜けた。

景色が背後へと流れる、次の瞬間にはOBの準備が整い、大きく背部が空気を吸い出した。このまま最高速度でぶつちぎれば作戦エリアからの離脱は叶う。

ああああ俺のハーレムが遠ざかって行く……グツバイ桃源郷

『ッ、そんな』

あと少して加勢出来たヴェーロノークが悲嘆の声を上げる、しかし追従するメリーゲートは何も言わず、不気味な沈黙を守った。

そして俺の機体が大きく反り、OBを開始する寸前に　―　小さく呟いた。

『今』

結果。

ボン、と機体の背で爆炎が上がった。

接続されたAMSから情報が流れて来る、OBの不発、背部ブースター全損、EN回路使用不可能、供給量減少、機体高度維持不可能、一体何が起きたのか。一瞬の混乱が虚を突き、そして公開無線が新たな敵の来訪を伝えた。

『お許し下さい、^{愛しい人}??的、リリウムが貴方を愛す事を……』

素早く発信源を特定、視界が拡大され目の前にとある機体が映し出される。

― アンビエント

十数キロ先の廃ビルの屋上に膝を着き、ライフルの銃口を此方に向けながら佇む純白

のネクスト。

BFFの切り札、カロードランク2

リンクス【リリウム・ウォルコット】

彼女に背部のブースターを狙撃されたのだ、そう理解した瞬間に機体は海面へ向かって落下を始めた。KP EN共に残量はゼロ、そして狙撃によつて内部機構にまで損害を加えられた機体は小爆発を繰り返し、煙を上げていた。

『馬鹿野郎が……ッ』

声が聞こえる、悲しみと、後悔の声だ。

オペレーターである彼女にせめて一言、何かを告げようとして、けれど機体を飲み込む水流と警告音に掻き消された。

— A P O

最後に俺が思った事は—

リリウムたんペロペロしたい。

— ミッション内容の変更を確認

ミッション目標 【メイ・グリーンフィールド エイ||プール 両名との永久婚姻契約】

目標変更―【メイ・グリンフィールド エイロプール
名との永久婚姻契約】
リリウム・ウォルコット 三

後始末

シリエジオ 没すー

この情報は瞬く間に企業間を駆け巡った。セレンヘイズ、霞スミカの後継者であり類稀な戦闘センスと高いAMS適正を持つカロードランク1の存在は、企業連にとつても小さくない戦力だった。そしてその彼の戦闘能力の高さは皆評価しており、彼の人物が撃墜されたという事実に驚きを隠せなかったのである。すぐさま各グループは情報収集を開始し、誰がランク1を討ち取ったのかという確認を行う。

そしてそのランク1 シリエジオを撃破した存在が明らかになると、企業連は大いに困惑した。

メイ・グリンフィールド

エイルプール

リリウム・ウォルコット

計三名の女性リンクス。このリンクス達とシリエジオの間にはそれなりの友好があり、それは企業連も知るところである。そんな彼女達がランク1を襲撃したという事

実、それに加えソルデイオス・オービットとメガリス高射砲、G Aのハイエンド部隊まで戦線に加わっていたというではないか。完全に討ち取る為の布陣、企業連、特にG Aグループとインテリオルグループから除け者にされたオーメルはこの情報を掴むや否や両グループを糾弾した。

B F F G A ラインアーク インテリオル・ユニオン 四つの企業、正確に言うのであればG A傘下のB F Fを除いたとしても、三つの企業が手を組んだ。しかもラインアークに至っては反企業勢力である。

〔ラインアーク〕 ー 過去、ランクーステイシスとシリエジオ参戦、ラインアーク襲撃戦にてランク9、ホワイト・グリントという最高戦力を失った彼の勢力は衰退の一途を辿っている。だが一カ月前からホワイト・グリントに代わる新たなネクストを招き入れ、その力を取り戻しつつあった。ラインアーク襲撃戦にてホワイト・グリント搭乗者であるリンクスの死亡は確認されておらず企業連としてはラインアークの崩れない姿勢を鑑みて仕留め切れなかったという結論を出していた。首長のブロック・セラノも未だ反企業勢力として存在し続ける事を明言している。

この三企業の協力が各勢力に大きな波紋を起こす。

シリエジオは確かにどの企業にも所属しないフリーの傭兵ではあったが、その依頼達成率、戦力共にランク1に相応しい英傑であった。故にどの企業にとっても失くすには

惜しい人材だったのである、でなければカラードシステムのトップになど立つ事は出来ない。

ただの依頼で命を落とすのならばまだ良い、それは彼自身の能力不足であり、この世界では珍しい事では無いから。

問題は、彼を屠る方法にあった。

偽の依頼でシリエジオを呼び出し、僚機信号で反撃を封じ、ハイエンドで包囲網を築く、そこにソルデイオス・オービットとメガリス高射砲で動きを制限させネクスト三機で仕留める。

ランクーを仕留めると言っても余りにも惨い、そして卑劣な戦いであった。この戦いに掛かった費用だけでも裕に兆は超える。

そこまでして彼を消す理由は何か？ 彼はオツツダルヴァの様に一企業に属してる訳でも無く、どこの企業から恨みを買っているという訳でも無かった。確かに彼は今まで多くの企業と戦ったが、それ以上に多くの企業へ利益を齎して来た。だからこそ彼は企業連より重宝され、今の地位に就いたのである。

だからこそ解せない、なぜ彼を騙す様な真似までして屠ったのか？

フリーの傭兵を撃破してはいけななどルールは無い、それは誰も得をしないからされないだけであって、実行したからと言ってお咎めがある訳でもない。

しかし、今回の一件でこの四勢力の立場は確実に悪化した。

特にGAグループ、インテリオルグループの中樞が手を組み、自身のみが除け者であるオーメルグループは良い顔をしない。それは確実に企業連を蝕み、内部から腐食させる癌^{ガシ}であった。

『終わった……のよね』

メリーゲートから公開通信が飛ぶ、それに対してヴェーロノークは『恐らく』と返答した。ブースターごと背部を狙撃されたシリエジオは海に没し、水没した機体を引き揚げる為海上ではハイエンド部隊と回収艦が水没地点へ集まっている。

それを空中に浮いたまま二機のネクストが見つめていた。

『予定通り……これで良いのですね、共謀者』

二人の間に割って入る様に、廃ビルから一機のネクストが浮上してくる。それは最後まで自身のネクストをシリエジオに感知させず、見事に彼を仕留めたBFFの切り札。

アンビエント —

『流石の腕前ですね、コックピットを避けブースターと供給ラインを的確に撃ち抜くなんて』

ヴェーロノークは今しがたランクーを撃ち抜いた射撃の技量に称賛を送る、対してア

ンビエントは素っ気なく返した。

『OB前は反動制御の為機体が一時的に硬直します、止まった機体ならば的と大差ありません』

もしこちらの存在が露呈していたら、避けられていましたと。

そこには彼に対する確かな尊敬と、不意打ちに近い攻撃をした後悔が滲み出ていた。アンビエントは今回の作戦で如何に存在を悟られないかに賭けていた、現在のアンビエントはPプライマルアーミーAも展開せず、サーマルによる熱探知を避けるべく機体出力を半分以上抑えている。更に金属光沢による目視発見を防止する為、機体表面に反射防止剤も使用する徹底ぶり、それが功を成し彼女は最後まで彼に気付かれる事が無かった。

しかし、彼女の内面に渦巻く感情は複雑だ。

作戦成功を素直に喜びたい気持ちと、彼に対する申し訳無さ、懺悔の気持ちが溢れ絡み合っていた。

『……今更、やめるなんて言わないわよね』

じつとシリエジオの撃墜地点を眺めるアンビエントに、メリーゲートが問いかける。アンビエントの内面を察したメリーゲート、その声には確かな気迫が籠り半ば強制させる迫力があつた。

『勿論です、でなければ……王大人のご信頼に背く事など』

どこか切羽詰まった声でアンビエントは肯定する。その返答を聞きながら『そう』とメリーゲートは何か思案気な声を上げた。

『王小龍……あの老人に仕える価値なんて無いと思うけど……』

『私にとつては恩人なのです、メイ・グリーンフィールド、王大人を貶める発言は許容出来ません』

そう言つてアンビエントはメリーゲートに怒気を向ける。しかしソレは、中身の無い装飾の怒りであつた。

言葉でこそ王小龍を擁護している、だがアンビエントが実際に動く事は無い。それは既に彼女の第一優先が王小龍から、シリエジオに変わつてゐる事を示していた。その様子を見てメリーゲートは肩を竦め、僅かに二人へ機体を寄せた。

『恩人よりも愛する人を取る……私は、良いと思います、こんな世界なのですから、成したい事も成せず死んでしまうのが、私は何より恐ろしい』

ヴェーロノークは自分の感情を吐露しつつ、彼に想いを馳せる。この計画を仕上げたのはメリーゲートだが、元々の発案者はヴェーロノークであつた。彼女は想うだけでは飽き足らず、彼を独占する計画を二人に持ちかけたのである。

王大人に仕えながら、彼の事しか考えられなくなった「リリウム・ウオルコット」

彼と幾多の戦場を潜り抜けていく内に、一方的な好意を抱いてしまった「メイ・グリ

ンファイールド」

殺伐としたこの世界で、唯一人の優しさを知った「エイリプール」

理由は異なれど、彼を求めると言う部分だけは一緒だった。

けれど彼はカロードの頂点に立つ男、そう易々と独占出来る筈が無い。企業連はそんな関係を許すとは思えないし、強奪するだけの力や権力を持っている訳でも無かった。

既に戦場の尖兵と成り下がったネクスト、例え単機でA^{アームスポート}Fを墮とせても企業を相手取る事は出来ない。

けれど一人では無く、二人ならば、三人ならばどうだ？

ネクストが尖兵に成り下がったからと言つて、その戦闘能力まで失われた訳では無い。元よりこの兵器は、個で群を磨り潰す為のモノ。それが三機、到底無視は出来まい。そうして手を組み水面下で事を進め、達成した依頼の報酬を少しづつ出し合つて、何度も計画を練り直し、何度も交渉を重ねながら。B F F G A インテリオル・ユニオン
これだけの大企業を納得させ動かす為の下準備、それだけで二年の月日を掛けた。

そうして三人は今、此処に揃つたのである。

『……彼と逢つたら、まず何を話そうかしら』

メリーゲートが二人に問う、その言葉にヴェーロノークとアンビエントは言葉を詰まらせた。

意外な事にこの三人はシリエジオの搭乗者、リンクスの顔を見た事が無かった。しかしそれはある意味当然と言えば当然で、寧ろリンクス同士で顔見知りという方が珍しい。

ネクストは通常兵器で撃墜する事は難しく、ほぼ不可能と言って良い、それこそ例外はA Fのみ。戦場の尖兵と成り果てたとは言え、ネクストの脅威は去っていないかった。

しかし大多数の凡人で操縦するA Fとは違い、ネクストはたった一人のリンクスで稼働する。つまりそれは、そのリンクスを殺害すればネクスト単体を無効化できるという事。リンクスと言えど機体に搭乗していなければ人と変わらない、それはどれほど優れたネクスト乗りでも同じ。

だからこそ、傭兵たちは自身の存在を秘匿する。

例え戦場で背を預ける僚機でも、顔を晒すなど論外だった。

故に三人はそれぞれ脳内で理想の彼を作り上げる、最も既に彼の内面を知る彼女達にとつて外見など些末な問題ではあつたが。

『取り敢えず……最初は謝罪、でしようか』

『私も、背後から撃つた非礼を詫びます』

ヴェーロノークとアンビエントから発せられる通信が重なる、二人は同じ趣旨の言葉を口にした。それを聞いてメリーゲートはコックピットで一人、口元に笑みを浮かべ

る。

『そう、じゃあ私は一番乗りで告白させて貰うわ』

『なっ』

『それはっ』

メリーゲートの言葉にヴェーロノーク、アンビエント両者から非難めいた声がかかる。しかしそれを遮る様にGAのハイエンド水上部隊からシリエジオのサルベージ成功の報が届いた。

幸いコックピットの浸水もそれほど進行しておらず、リンクスの生存も確認できたそうだ。

『サルベージが成功したわ、このまま予定通りビッグボックスへ搬入しましょう』

そう言って他の二機より早く降下を始めるメリーゲート。その後ろを、二機が慌てて追従した。

『待って下さい、メイさん！ 先ほどの発言の撤回を要求します！』

『リリウムは見過ごせません、抜け駆けは無いです』

先に想いを伝えるのは私だと、各々が叫びながら。

メイ・グリーンフィールドの場合

メイ・グリーンフィールドの場合

彼との出会いは何時まで遡^{さかのぼ}るだろうか、少なくとも一番最初に戦場を共にしたのは数年以上前の話だ。リッチランド・農業プラントを防衛するアルゼブラ部隊の襲撃、GAの依頼を受けた彼の僚機として私は指名された。その時彼はまだカロードの中でもそれ程高いランクになく、私より下位だったのを覚えている。

『メリーゲートよ、作戦を開始しましょう』

『上手く盾にしてね、その為の重量機よ』

敵の主力はGA製AF『ランドクラブ』、量産型とは言えその火力はネクストにとつて脅威、百凡のリンクスであれば敗れてもおかしくない敵。私は当初、近接と薄い装甲で固められた彼の機体に対し、あまり良い感情を抱いていなかった。そんな機体では、最悪主砲が直撃した時PAごと機体を撃ち抜かれてしまうのではないかと。

それ故の言葉だった、初対面とは言え僚機だ、撃墜されてしまっっては目覚めが悪い。私の機体はGA製のパーツを多く使用している、装甲が厚くKP値も高かった、数発の

直撃など有って無い様なモノ、危なくなったら盾にしてくれても良い、そう言うとは彼は。『問題無い』

それだけ口にして、正面から斬り込んでいった。

正面にはランドクラブ、周囲にはアルゼブラのノーマル部隊が弾幕を張っている。私
の機体ならば正面から挑む事も可能だろう、しかし彼は軽量機で正面突破を敢行した。

『なっ、ちよつと貴方っ』

思わず公開無線で叫ぶ、けれど返ってきた言葉は素っ気なく、けれど力の籠った一言
だった。

『仲間を盾になど出来るか』

その一言に、私は思わず言葉を詰まらせた。

彼は強かった、それも圧倒的に。

オペレーターのセレン・ヘイズ、旧『霞スミカ』の機体名である「シリエジオ」を継
いだ彼の実力は本物だった。弾丸の雨を掻い潜り、擦れ違いざまにブレードで一閃、高
出力のエネルギー刃は摂氏五千度にて鋼鉄の装甲を焼き切る。彼が通過した後には、上
半身の消し飛んだノーマルが残った。

立ち塞がるノーマルを屠りながらランドクラブへと迫るシリエジオ、その動きは雷神
の如く。

クイックブリスト

Q Bを多用し、現れては消え、消えては現れる。銃弾で捉える事も叶わず、気付いた時に斬り捨てられている。類稀な戦闘センスとAMS適正が成せる、天才の技。

『……強い』

私は恥ずかしながら、自分が戦場に居る事も忘れ彼の戦闘に魅入られてしまっていた。幾つもの修羅場を潜り抜けた私の思考は半ば反射で回避行動を機体にとらせ、ノーマルに向け銃撃を開始するが、私の意識は彼にのみ向けられていた。

ランドクラブの主砲が大地を抉り、大きな爆発を生み出す。けれど着弾地点に彼の姿は無く、主砲の弾速がスローに見えるほど彼の動きは速かった。

そうしてランドクラブとの距離を詰めた彼は、AFの直上へと現れる。次の瞬間、爆発する緑色の光。

アサルトアーマー、PAを反転させ最強の盾を矛へと変える諸刃の剣、それを彼は躊躇い無く行った。

眩い光にKP値が減退して行く、光は数秒で形を潜めるが、視界にチラつく緑色の粒子群。焼け焦げ、内部機構の露出したランドクラブの上に立つ彼の機体はPAを消失していた。

けれどPAの再展開は必要ない。

コジマ粒子が漂うプラント内に、残存する敵勢力は無かった。時間にして凡そ数分、

リッチランド農業プラントを防衛する部隊が、ものの数分で姿を消した。

『……ミツシヨン終了、シリエジオ、帰還する』

彼の声でハツと意識を戻す。展開したミサイル発射管を閉じ、銃器をそつと下ろした。

『作戦完了か……相性が良いみたいね、貴方とは』

取り繕う様に私は口を開く、後半は私自身の願望と言つても良かった。けれど彼はソレに対し何も反対する事は無く、小さく『そうかもな』とだけ返してくれた。

『あ……』

その事に、少しだけ鼓動が高まる。

これが始まり、彼との出会い。

その戦いに魅入られ、シリエジオと言う英傑と共に戦場を巡る事になる、今の私の原点。

その後シリエジオ、彼はG Aの依頼を受けるとき、必ず僚機として私を指名した。

彼は最初の言葉通り、一度として私を盾にする事は無かった。

今までの僚機は重量機である私を囨にし、依頼を完遂して来た。中には大破寸前とな

り、私に敵を押し付けて退避したリンクスだっている。けれど彼はどんな苦境でも、どんな敵が相手でも、必ず私の前で戦い、敵を屠つて来た。

彼との共同ミッションにて、私の被弾率は脅威の一割以下。

重量機である以上、弾に当たって然るべきだと言うのに彼と組んでからは被弾すること自体が珍しくなった。それは単に彼が全ての攻撃を受け持っているから。私の仕事は専ら後方支援で、彼という分かりやすい脅威に目を釘付けにされている敵を確実に屠るだけ、こんなのはネクストでなくとも出来る仕事。

だと言うのに彼は言う。

— 今回も助かった、ありがとう と。

……生まれてからずっと、リンクスとして戦ってきた。

だからそういう、男女のそういう事とか、考えた事も想像した事も無い。

リンクスは短命だから。

少なくともコジマ粒子を撒き散らす汚染源に搭乗している私達は、総じて短命である。蓄積するコジマ汚染がいつか、私達の体を内側から破壊する。つまり私達は消耗品、ネクストと言う棺桶に乗り死を撒き散らすだけの部品なのだ。

GAに所属する私だって、その宿命からは逃れられない。

けれど、そう。

少しだけ夢想する。

この世界で本当に、自由と幸せという言葉が存在するのならば。

それはきつとー

彼と共に過ごす世界であると。

切っ掛けは突然。

旧ビースシティ、未確認A Fの撃破、いつも通りG Aからの依頼。分かっているのはG A製A Fの改良機である事、それだけ。具体的な戦力や攻撃方法、脅威なども一切無し。依頼情報としては余りにも不足している、きな臭いミッションだった。

『こちらメリーゲートよ、こちらでも始めるわ』

『怪しい任務を受けるものね、貴方も』

けれど彼はこの依頼を受けた、もし彼が受けなければG A傘下の有澤重工所属、「雷電」と共に私が戦う事になっていた。だからそんな事を言いつつも、本当は彼が受けてくれて嬉しかった。

そして彼と共にG A製A F、ランドクラブと思わしき巨軀へと近付いて行く。既に彼と共に戦った戦場の数は二桁を軽く超える、ここに至つて私は彼に対して信頼以上、好意以上の感情を覚えていた。

彼とならばどんな敵でも屠れる、戦つて勝てる、私達ならば――

『何コレ……ふざけてるの……?』

主砲がソルディオス砲に置き換えられている、それは遠目にも確認出来た。最悪のコジマキャノン、直撃すればPプライマルアーマーAごと機体装甲を持つていかれる。だが彼にとつては問題無い、彼が今までの任務で主砲の直撃を許した事は一度として無く、私も廃ビルを上手く利用し遠方から攻撃を加える予定だった。

それが一気に崩れる。

『分離飛行だと……!?!』

ソルディオス砲の自立飛行、主砲自体にバーニアが内臓されており計四基の「最悪のコジマキャノン」が宙に浮いた。固定されているのならやり様はあった、どれだけ威力の主砲だろうと当たらなければ問題は無い、けれど主砲が自立飛行し砲角や位置制限が無いとなればその限りではない。

それは正しく脅威まじそのものだ。

『冗談、でしよっ!』

急速に本体であるランドクラブから離れ、私達を囲むように展開するソルディオス砲。ソルディオスのオービットタイプである以上、それは最早主砲なんて生易しい存在ではない。

窪んだ一つ目に緑色の光が宿る、それは砲撃の前兆。愚鈍な機体に鞭打ってQBを多用、ランダム回避により飛来した二つの粒子をどうにか避ける。しかし重量機である以上ENの消費が激しく、あまりに激しい回避行動はかえって自分の首を絞める事になる。

『KP減退中……掠っただけでPAが抉れるなんて、本当に、ふざけてる』

彼の方を見てやれば、私と同じく二基のソルディオス砲に苦戦していた。ネクスト並みの機動力を持つオービットタイプは、彼が接近した瞬間距離を離そうと砲撃を行いつつ後退する。恐らく彼が近接タイプである事、アサルトアーマーを警戒しているのだろう。コジマ粒子の天敵はコジマ粒子自身、あのオービットタイプの攻撃方法もコジマ粒子そのものなのだから。

二基に挟まれつつ射撃を行い、表面の装甲を削っていく。どうやらこの主砲、装甲も中々硬いらしい。メリーゲートの誇る大口径バズーカが直撃しても堕ちない、流石原形はGA製と言うところか、ランドクラブ同様実弾防御には自信があると見える。

彼の方は機動力を生かし主砲を躲しつつ、何度かソルディオス砲へ斬り込んでいます。

その内何度かブレード刃が直撃し、三度目の衝突でソルディオス砲が爆炎を上げた。
『やった……！』

思わず私が歓声を上げる、彼はそのまま反転し残ったもう一基へ肉薄する。それを見て私は、彼がもう一基を仕留めるまで防衛に専念しようと方針を固めた。

廃ビルを盾にし、ギリギリのEN管理で何とか猛攻を凌ぐ。直撃は受けない、しかしPAは消失する覚悟で回避を行う。申し訳程度に射撃は行うが、何とも効果が上がっていないとは言えない、確かにAPは削れているだろうがバズーカが警戒されている為、一度直撃して以来二度目の被弾は許されていなかった。ライフルの弾丸は火花を散らして装甲を凹ませる、だがそれだけ。

何とも歯痒い状況だ。

『っ、弾薬費用度外視よ、これでどうツ!?!』

火器管制装置

弾切れになったバズーカを投げ捨て、肩部のミサイル発射管を開く。そしてFCSがロックオンを完了すると同時、白煙が舞い上がる。火力の底上げ分も入れ五十近い誘導弾頭がソルディオス砲目掛けて飛来する。大きく横へ逸れ回避する球体を追尾する白煙の群れを視界に入れながら、その間に反転、もう一方のソルディオス砲へロックオンを行う。

しかし一拍遅かった、振り返った私の視界に飛び込んだのは緑色の光。

しまった、主砲が既に放たれていたっ！

後悔するには遅い、光が機体を包み込み込みP Aと主砲が拮抗。P Aが大きく減少しメーターが『0』を指す。瞬間P Aが消滅し、霧散したコジマ粒子が散る中主砲が装甲を強かに叩いた。

『つうあッ』

大きく揺れる機体、実体を持たないエネルギー弾とは言え主砲クラスになると爆発を伴う。衝撃に吹き飛ばされた機体が大きく後退、廃ビルへと突っ込む。

— 機体損傷三十% P A消失、再展開まで……

アラームが機内に響き渡る、拙い、直撃を受けてしまった。何とか機体を起こそうとして気付く、手に持っていた筈のライフルが無くなっている。

今の攻撃を受けた拍子に落としたのか、思わず表情が険しくなってしまう。押し掛かった瓦礫を退かしてスラストを吹かす、そのまま何とか脱出を図ろうとして。

目の前に、ソルディオス砲が—

『ッ!?!』

ぞつと背筋が凍る。

その一つ目に緑色の光は無い、けれど代わりに、ソルディオス砲そのものが眩く発光し始めた。

私はこの現象を知っている、これは、そう、あの最悪の

『アサルトアーマー……ッ?!』

ランドクラブを一撃で沈める攻撃が、今放たれようとしていた。

なんでオービットがアサルトアーマーを、一瞬思考にノイズが走る。だが相手はコジマキャノンを搭載しているのだ、確かに、使えない筈が無い。

PAは消失、APは三割減少、残り七割で受けきれるか？

無理だ、この機体はGA製。パーツを多用している、それは実弾防御に優れている分、EN攻撃やコジマ粒子には滅法弱いと言う事。

アームが鳴り響く、予備格納パーツからハンドガンを取り出し乱射、ソルディオス砲の窪みへ全弾命中するが光が収まる様子は無い。ガチン、という音と共にハンドガンが弾切れを起こし、同時に目の前のソルディオス砲が爆炎を上げた。弱点を撃ち続けた、流石に耐久値を上回ったのだろう。

しかし、間に合わない。

機体は瓦礫に埋もれている、これは直撃しー

機体が光に包まれた。

次に視界に入ったのは、機体の後ろ姿。

コジマ粒子が緑色の淡い光を撒き散らし、それに包まれるようにしてソレは立っていた。

それも私の知っている、美しいフォルム。

灼熱のブレード刃を突き立て、左腕の消失した彼の機体。

シリエジオ

一拍遅れて、目の前にあったソルディオス砲が爆発四散する。その爆発を受けて彼の機体が大きく揺れた。

『シリエジオっ！』

思わず叫ぶ、しかし彼は私の無線に反応する事無く、ランドクラブへと向かって駆けた。恐らくENが回復しきっていないのだろう、見れば私にアサルトアーマーを放ったソルディオス砲以外、全て砂漠に埋もれて黒煙を上げていた。きつと彼が全て仕留めたのだ、私は彼を追うべく機体を立ち上がらせる。

— 機体損傷八十% 作戦エリアからの離脱を推奨しま

「うるさいッ！ 早く予備の武装を……ブレードっ、早くッ！」

思わずコックピット内で怒鳴る、今は撤退を推奨するアナウンスが心底憎かった。脚部格納部位から予備の武装、ENブレードを掻つ攫う様に取り出し、装着。そのまま彼を追つてランドクラブへと飛ぶ。

『おおおおおッ!!』

公開通信で彼の叫び声が聞こえる、彼は冷静だ。作戦中に叫ぶ事など、それも通信した状態を忘れてそんな姿を見せるなんて、一度も無かった。

彼の機体は左腕を破損し、頭部など半壊していた。恐らくサブモニタを使用して戦っているのだろう、ランドクラブ本体から迫る連射砲の弾丸をギリギリで避けつつ肉薄、その鋼のAFヘブレード刃を突き立てる。

そのままスラスターを吹かし上昇、突き立てたブレードが装甲を融解させ一本の線を描き出した。融解した装甲の隙間から爆炎が噴き出す、ダメージは確実に通っている。

『ッ、あああッ!』

私も彼に続き、低空飛行でランドクラブへと突撃する。少しでも彼に向かう連射砲を減らすため、敢えて正面から攻勢を仕掛けた。

その目論見通り、連射砲の殆どが重量機である私へと集中する。幾多の弾丸がメリーゲートの装甲に穴を空け、爆発を引き起こした。けれど私の機体はGA製、例え破損していようと実弾防御になれば分が有る。

— 機体損傷九十% これ以上の戦闘続行は危険です

爆炎が右脚部を吹き飛ばした、そのまま左腕も持っていかれる、武装のない腕など構うものか。機体の残骸が砂漠の上を転がって四散した。だが一步遅い、私の方が一步分早かった。

飛び上がり、機体をランドクラブの前面へ叩き付ける、衝撃に機体が軋むが構わない。そのままエネルギー刃を形成し、ランドクラブへと突き刺した。爆炎が上がりランドクラブの各所から爆発が巻き起こる。

『これでっ、落ちてっ！』

突き刺したブレードを抜き、融解した装甲の間にハンドガンの銃口を突き入れる。幾ら装甲が硬くたって、内部機構に装甲は存在しない。引き金を引くと同時にマズルフラッシュがランドクラブの内部で瞬き、何度も何度も弾丸を吐き出す。その度に爆炎がメリーゲートを包み、右腕部の関節部位が融解し露出するほどの熱を発した。

そして遂に、その巨体が膝を屈する。

— AF ランドクラブの撃墜を確認

一際大きな爆炎が上がり、ランドクラブが機能を停止する。

その爆炎に吞まれたメリーゲートは、融解した右腕を置き去りにする形で吹き飛ばされた。そのまま砂漠の上を転がり、最期は滑る形で停止する。残ったのは左足一本と壊

れかけの頭部だけ、殆ど撃破されたと言つて良い損傷。

— 機体損傷九十八% 搭乗リンクスは速やかに脱出し救援信号を

「はっ、はっ、はっ」

息が上がる、ネクストを操縦しているだけでこんなに息を乱したのは初めてだった。初陣でも此処まで呼吸が乱れる事は無かつたのに。

そして殆ど死んだカメラで彼を探す、彼は、彼は無事だろうか。

『っ、こちらメリーゲート、シリエジオ！ 無事なら応答を……っ』

『こちらシリエジオ、ミッション完了だ、帰還しよう』

声は背後から聞こえた。仰向けに転がったまま慌てて頭部カメラを反転させれば、そこには片腕を失い、頭部を半壊させながら両足で立つネクストが居た。彼だ、彼は無事だった。

『良かった……っ』

その事に私は大きく安堵する。それから、彼に庇われた事、彼の足を引つ張つてしまつた事を恥じる。最悪、彼を殺してしまう所だったのだ。もし私が居なければ、彼は無傷で依頼を終えていたかもしれないのに。

『ありがとう、今回の依頼……全部あなたのお陰ね』

私が居なければ。

私が、居るから。

けれどそれを口に出す事は無い、浅ましい事だ。彼の足を引つ張ってしまった、彼を危険に晒してしまった。

それでも尚、これからも彼と共に居たいと思っってしまったている。

だから言えない、もう彼の足を引つ張らない為に、命を危険に晒さないために。

もう私を僚機にしないで、なんて。

なんてー

なんて醜い女だろう、私は。

『いや、こちらこそすまない、守り切れなかった、機体は動かせるか?』

『……背部のストラスターも全損、足は見ての通り、少なくとも回収を呼ばないと無理ね』
でも、もし彼がこれきりにしようと言うのなら、私はそれに従うだろう。これだけの事をしてしまって、私には彼の傍に居る資格が無い。だから、彼がそういったその時はー

表情を押し殺して、G Aに救援信号を送る。彼の機体も限界だ、私の機体を引つ張って帰還する事は難しいだろう。ここは素直にG Aの回収部隊を待つ事にした。

『今回は……その、ごめんなさい、足を引つ張ってしまったって』

回収部隊を待つ間、私は彼に語り掛ける。それは謝罪の言葉、既に私と彼の戦闘能力

は隔絶した位置にある、彼が上で私が下だ。いつの間にか彼のカラードランクは私を超え、一桁台に食い込んでいた。

『いや、今回の依頼、君が居て助かった』

『嘘、だって私、何も出来なかった』

仕留めた、いや、大破させたソルディオス砲は一基だけ。それも撃破自体は彼が突き刺したブレードだ、今回私は囷どころか、盾にすらなれなかった。何の為の重量機だ、何が上手く盾にしてだ。

考えれば考えるほど憂鬱になる、私は彼の隣に並ぶ力を持っていない。それを今回の依頼でまざまざと見せつけられてしまった。

『……私じゃ、貴方の僚機は力不足なのかもしれない』

そんな言葉を、気が付けば吐いていた。

こんな、私は彼と離れたくないのに、まるで私を選ばないでと言っている様なモノじゃないか。けれど、それも事実、だから私はその言葉を引つ込める事はしなかった。

『メリーゲート……いや、メイ・グリーンフィールド』

彼が私の名を呼ぶ、それにハツと顔を上げた。強がるように、虚勢を張る様に『……何?』と答える。けれどその声は、少しだけ震えていた。

彼に拒絶されるのだろうか、もう二度とミッションには呼ばないと、そう言われてし

まうのだろうか。そんな未来を想像し、想像しただけで絶望感が込み上げて来る。

僚機に選ばないでと、遠回しに言ったのは私だ。

けれど、けど……。

— 君との僚機契約を放棄する

そんな言葉を考えて、涙が流れた。

嫌だ、本当はそんな事言われたくない、まだ彼と共にありたい。私は弱い、どうしようもなく、弱い。それは自覚しているし、彼の隣に並ぶには役不足である事も知っている。

けれど諦めきれない、あなたを諦めたくない。

私、強くなるから、強くなってみせるから、だから —

『次は必ず守る、だからこれからも宜しく頼む』

それは私にとっては望外の言葉だった。最初は理解出来なかった、彼が何と言ったのか。

それだけの事を私はした、命の危険にまで晒して、足を引つ張つて……それでも彼は何と言つた？

信じられないという思い、本当だろうかという疑惑、そして単純な歓喜がごちゃ混ぜになる。最初は言葉が出なかつた、喉がひつくと声を上げた。それを押し殺して一度無線を切る、口元を抑えて吐息を零す。あふれ出る感情は歓喜、それだけ。

それらを悟られない様に、いや、きつと気付かれているに違いない。嬉しさは目元を伝つて、震える喉が確実に物語つていた。

無線を開く、それから――

『つ、勿論……当たり前前よ、……だって、私達は』

――最高の相性、なのだから

そう口にした。

それは、今でも変わらない。

リリウム・ウォルコットの場合 前編

私の世界は、「王小龍」とそれ以外で出来ていた。

この世界に暴力のみが蔓延り、正義も悪も等しく企業という名の巨大な力の前に屈して早幾年。清浄な空を飛ぶクレイドルに乗る選ばれた人間以外は、地上ダウナーにて少しずつ滅びを待つ運命、そこに私の様な親無しが生きる術は存在しなかった。

生まれた時から地上に居た、世界については良き隣人が教えてくれた。私の親代わりになってくれた人だ、彼はキリストなる神を信じる人だった。私はそのキリストとやらを見た事が無かったので信仰出来なかつたが、彼が言うには世界を作った偉大な人らしい。そんな人ならきつと、いつかこの世界を幸福なモノにしてくれるだろう。

けれど彼は、私が十三を超えた辺りで息絶えてしまった。元より高齢だったが、ここに来て汚染が脳に届いたらしい。彼は最後までキリストを信じて死んだ。

「世に平穩のあらんことを——」

彼の口癖だった。

けれど、結局何も変わらなかった。

日々の糧は荒野に力強く生え伸びる野草か、既に息絶えた同胞^{にんげん}、或は動物の肉。水源は近くのクレーターに溜まった雨水、過去の戦争の残骸の中で辛うじて日々を繋ぐ。それでもネクストが来てしまえば全ては終わる、その美しい緑色粒子を以て全てを汚染してしまふから。上空を通過しただけでも駄目だ、水源は汚染され、食物も駄目になる。だから私がここに居るのは単^{ひたえ}に運が良かった、ただそれだけだ。

本当ならば私など、生きていない筈だったのだ。あの穢れた地上の上で徐々に朽ち果てるのを待つしか無かった、彼と同じように。けれどそれは不孝ではない、大多数の間がそうやって死に絶えて逝く^{ダウナー}のだから。だから、別に絶望などしていなかった。

「これは掘り出し物だな、地上^{ダウナー}など久しく来ていなかったが—— 私にも、そろそろ腕が必要な頃合いだ」

私は本当に運が良かった。

私達地上に生きる人間にとっては、天上人に等しいリンクス。BFF所属、ランク8、^{ワン・シヤオロン}【王小龍】。彼が私を地上から引き揚げ、ネクストと言う強大な力を与えた。

当初の私は何も知らず、何も分からず、理解せず、ただ流されるままだったが、どうやら私には高いAMS適正があつたらしい。強大な力は私の手足に良く馴染み、思う通

りに動かさせた。王小龍はその能力を見抜き、私をネクスト乗りとして育て上げたのだ。戦術、戦略、EN管理、ネクストの理想的な機動、武装の選択、ネクストに乗るために必要な事を全て。彼は私を救うだけでなく、その後一人で生きていく為の全てを与えてくれた。

「頼むぞリリウム—— 私に恥をかかせるな」

王小龍の口癖。

無論、恩人である彼に恥をかかせる訳にはいかない。私は死に物狂いで学び、訓練し、強くなった。彼に見捨てられれば全てを失うという恐怖もあった、あの泥水を啜り、汚染された食物を頬張り、その日の命を繋ぐにも精一杯の日々。

けれど、何よりも恩が勝った。王小龍に受けた恩を返したかった、こんな私でも役立つ事があるならばと、必要とされる喜びは、今までにない充足感を私に与えてくれた。

気が付けば彼に救われてから数年が経ち、彼に用意されたネクストにて、私はカラードランク2と言う椅子に座っていた。彼の役に立ちたい一心で依頼（ミツション）に挑み、何機ものネクストを墮として来た結果、企業連は私に次席の地位を用意したのだ。

王小龍より上のランクに居座る事に、私は微かな抵抗を覚えたが、当の王小龍はとも嬉しそうにしていたので何も言えなかつた。彼が喜ぶならばそれで良い、私の世界は【王小龍】を中心に回っているのだから。私は育て親である彼の事を思い出していた、キ

リストとやらは世界を作ったらしい、なら私のこの才能も、きつとそのキリストとやらが与えてくれたのだろう。その事に関してだけは、感謝していた。

そんな私でも唯一勝てない相手が居る。名を「オツツダルヴァ」と言った。カラードの中にて最強のランク1の称号を持つ、オールド所属の男性。レイレナードの出身で、周圀からは天才と呼ばれるリンクス。

王小龍からの勧めで一度だけ電子戦闘シミュレーションを行った事があるが、恐ろしく強かった。

巧みな弾道制御、QBによる予測不可能な回避、EN管理、機体誘導、全てが高い次元で纏まった、正しく天才、私の届かない領域に居る天上人。距離を空ければ詰められ、こちらの銃撃は全て見切られると言う有様。高機動ミサイルをライフルで全て撃墜された時など、何の悪夢かと目を疑った。

結果私は彼の愛機であるステイシスのAPを半分も削る事無く撃墜され、大破水没という失態を晒した。敗北後の私は蒼褪め、王小龍の顔に泥を塗ってしまったと絶望を覚えたが、当の王小龍はただ静かに頷き――

「敗北を知るのも必須、訓練で何度負けようと何も言わん、ただ実戦で役立てばそれで良い」

そう口にした。私は己の情けなさに泣きそうになった、だからこそ自身より強い彼に教えを請い、その技術をモノにしようと追い縋った。オツツダルヴァ様―― 彼が撃墜

されるまでの数カ月間、私は確かに彼の超絶技巧をこの目に焼き付けた。

オツツダルヴァ様は確かに天才だった。

私など足元にも及ばない、圧倒的な才能とセンス。カレードランク1の実力に見合ったその動きは、同じリンクスでさえも魅了する。いや、自身が同じくネクストを動かせるからこそ、その技巧に目を奪われるのだ。

けれど、オツツダルヴァ様は確かに強かったけれど、「決して最強では無かった」

—— ラインアーク所属 ランク9 ホワイト・グリント

—— フリーネクスト ランク3 シリエジオ

カレードを代表する三大ネクスト、ランク9ホワイト・グリントはランクこそ9だが、その実ランク1に匹敵する戦闘能力を秘めているのは公然の事実だった。国家解体戦争後、レイレナード社を単機で壊滅させたと言われる伝説的なネクスト、アスピナの傭兵【ジョシユア・アブライエン】を破った英雄。

そしてランク3、シリエジオ。この世界に姿を見せてから瞬く間に上位リンクスへと名を連ねた男。聞くところによると霞スミカの後継者と言われている。同じ後継者であるG Aの厄災、インテリオルのウイン・D・ファンションを破った実力は本物だ。装備は彼女の剣を彷彿させる、分厚いキサラギ製ブレードを二本。

あらゆるネクスト、ノーマル、AFを一刀の元に切り伏せる彼を欲する企業は多い。

自身を超える三人の存在は、どこか私に透明な壁を感じさせた。舞台が違う、役者が違う、自身という存在が立ち入る事の出来ない次元。王小龍はそれを【陰謀屋の限界】と笑った。

そして企業連によるラインアークへの制裁が始まる。

ランク1、ステイシスとランク3、シリエジオの共闘。迎え撃つのはリンクス戦争の英雄、ホワイト・グリント。

ランク2の私が出撃しないのは単（ひとえ）に王小龍がそれを望まなかったから。ラインアークが生き残ろうと、消え去ろうと、どうでも良い。王小龍の目的に関して言うのであれば、その存在はどちらであつても構わなかつた。

そして結果は——ランク3、シリエジオの生還。

ランク1、ステイシスは海に没し、ランク9、ホワイト・グリントもまた藻屑となつた。最初に堕ちたのはオツツダルヴァ様だと聞く、かのリンクス戦争の英雄はあの人の才を以てしても尚勝つたという事だろう。そして、その英雄を落とした男——シリエジオ。

彼は直ぐにランク1の椅子を用意され、カロードの頂点に立つた。霞スミカの後継者、リンクス戦争の英雄を堕としたリンクス、オツツダルヴァをも超える天才。周囲は

彼を持って囃し、そしてそれに比例して彼が出向く依頼（ミッション）は高難易度になつていった。

差が開く、ランクーとの差が。

ステイシスが海に没し、ホワイト・グリントが藻屑となつた今、ネクストの最強は彼であり、次席は私、リリウム・ウォルコットだ。そしてその間には決して埋められない、明確な差がある。彼と私では勝負にならない、戦つてもいまいと言ふのに、そんな言葉が頭を過つた。

「ランクーとの共闘だ、B F FのA F^{アームズフォート}、スピリット・オブ・マザーウィルを撃破しろ」
彼と接触する機会は存外早く、そして他ならぬ王小龍によつて齎された。

スピリット・オブ・マザーウィル、六脚歩行の巨大兵器。全高600m、全長2.4kmのA F。長射程の大口径実弾砲と数多の多弾頭ミサイル、近接防御兵器にて全身を固めた怪物。過去何機ものネクストを沈めた凡人の操る非ネクスト、その主砲の射程は200kmにも及び、現在B F FはこのA Fにより十年以上地上における覇権を握つていた。

成程、ランクーに依頼する内容としては妥当だろう。

そしてその難易度は察して余りある、ネクストは群を磨り潰す個として存在するが、並みのリンクスならば撃ち落されて終わる。あのホワイト・グリントでさえ仕留め切れ

ず、弾切れにより撤退した事のあるA Fだ。

「しかし、王小龍、私達はB F Fの専属リンクスです、同胞のA Fを破壊するなど——」
「その件に関しては問題無い、これは一種の『芝居』、オーメルとの契約が有る、B F F側も承知している事だ、B F Fがオーメルと秘密裏に会合を開いたのだ、そこで結んだ契約がB F Fのスピリット・オブ・マザーウィルの放棄、オーメルがそれに対し対価を支払う、シリエジオに対してはオーメルが別個に依頼を出した、しかしソレで撃破されても『実力で撃破された』と認識されてしまう、故に、今回の依頼にはリリウム、お前を同行させる、同じB F F所属のリンクスが参戦する事でB F Fの意思によってA Fを放棄したとアピールせねばならない」

勿論、この事はスピリット・オブ・マザーウィルの乗員には伝えられていない。彼らは突然の裏切りに驚くだろう、しかし問題は無い。

「死体は喋らん」

王小龍は静かにそう吐き捨てた。